
レフト & ライト

タマ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レフト & ライト

【Zマーク】

Z7872L

【作者名】

タマ子

【あらすじ】

ひとりを愛する少女と、姿を消した彼との話。

ロスト

爪の先に、くつついしたシールのかけらを剥がしたかっただけなのに
ちょっと手間取つていたら、視界から彼が消えていた。

周りを見渡したけど、彼はもうどこかへ行つていて、
知らない顔の人間ばかりが数人、かたまつてちらほらと、話をして
いる。

少しの間、息を止めていたことに気付いて、ふーっと吐き出した。
かさつと、ノートの上のシールのかけらが、わたしのテキトーな文
字の上で揺れた。

なんとなく、もう帰りたくなつて、本日最後の講義は抜けることこ
した。

校庭を自転車で抜けながら、先ほど、授業中に見つめていた彼の背
中を思い出す。

わたしは、彼にとても憧れていた。すらっとしたスタイルと、ゆる
くかかるパーマ。きちんと閉じられたシャツの胸元。とても造り
のきれいなパンツを履き、品の良い、カバンを使っていた。騒ぐで
もなく、いつも静かに笑っているタイプだつた。授業もまじめに受
けていて、一生懸命ノートに書き込む姿が、とても好きだつた。彼
と同じ授業が週に3回ほどあるのだが、それが私の楽しみたつだ。
彼の少し後ろに座り、一時間半、見続けていた。ちつとも眠くなか
つた。

彼とは会話なんてしたことが無かつた。そもそも名前すら知らない。
共通の知人もいないし、何しろ私にはあまり友人が居ない。ただ、

一方的に見つめているだけだった。それだけで十分だ。そんな毎日だった。

ところが。

ある日を境に、彼がぱつたりと授業に現れなくなつた。いつも一緒に座っていたグループはいるのに、彼だけがいなくなつてしまつた。

はじめは、体調が悪いだけかもしれない、と思つたが、一週間も休みが続くと、ざわざわと胸がさわぎだした。なぜ彼が来ないのかを必死に考えていた。彼の背中を思い出すたび、苦しくて悲しくて、どうしてももう一度、彼を見たかった。

彼が消えてから三週間たつた日、私は意を決して、彼とよく一緒にいた男性に話しかける事にした。

手がかり

「すみません」

彼が姿を消して3週目、いてもたつてもいられず、私は彼とよく一緒にいた男性に話しかけた。

「はい？」

驚いたように、私を見る男性。私は、顔が真っ赤になるのを自覚しながら続けた。

「あの、突然すみません。いつも、あなたと一緒に授業を受けていた方、少しパーソンのかかった男性のことで聞きたいのですが・・・」

（なぜいなくなつたのかを、聞きたがっていることを、察してほしい） そう祈りながら彼を見ると、田を見開きながらひりひりに寄つて來た。そして、

「良輔の知り合いでですか？」

と、聞かれた。まずい、不審に思われている。

「いえ、ぜんぜん、知り合いとかじゃないんです、すみません。」

あわてて話を切り上げようとするといふと、

「あの！何か知ってるんですか？」

と、腕をつかまれてしまった。彼の目は真剣だった。

「ちよっと、時間ありますか？」

彼が言った。

「ええ、少しなら・・・」

「ちょっと外へいきましょう。あなたと話がしたい。」

なんだか逆に捕まってしまった。何も分からぬまま、彼のことを知れるならと思い、話することにした。私たちは、大学のそばのカフェに向かった。

カフェは大学から道路をはさんだ向かい側にあり、学生のたまり場だった。まだ昼間だったためお客様もまばらで、私たちは店の奥の、向かい合った小さなソファに腰掛けた。適当に飲み物を注文し、早速その男性は話し始めた。

あこがれの彼の名前は「良輔」だった。そして、良輔さんの友達は「タカシ」と名乗った。

二人は中学時代の同級生で、大学で再会したらしい。それからはよく一緒に呑んだり出かけたりしていたそうだ。

「で、高見さんは良輔の知り合いじゃないんだよね？」

高見英子、は私のなまえだ。ひさびさに男の人と一人きりになり、私は少し緊張していた。うんうん、と黙つてうなづく。

「良輔、ほんとうに3週間前からぱつたり連絡がとれなくなつたんだ。」

アイスバーにも手をつけず、タカシさんは続ける。

「オレ、良輔とは仲よかつたけど、あいつあまり自分のことしゃべらなくて、いつもオレのどうでもいい話を聞いてくれていたんだ。彼女もいなかつたみたいだし、なんだろうな、たぶんここ最近で一番あいつと仲良かつたのオレのはずなんだけど、とにかく連絡がとれないんだよ。ケータイつながらないし、家にも帰ってないみたいで。家族の連絡先とかも知らないし、

警察に届けるのもなんか違うと思うし、すじこ心配になつてんだけど、」

と、話を止めた。

「こないだ、こんなのが見つけたんだよ。」

そういうてタカシさんは、手帳から紙切れを取り出した。そこには、見知らぬ女性の横顔がボールペンで描かれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7872/>

レフト & ライト

2010年10月15日22時03分発行